

# 藍住町の方言

方言班 (徳島県方言学会)

仙波 光明\*

## 1. はじめに

藍住町は徳島県下で数少ない人口増加地域である。平成2年以降の10年間に4,697人増加し、平成11年7月には人口3万人を超えた。この人口増加のかなりの部分は、町外からの流入者であろう。筆者もその1人である。

かつて方言調査は、その地域に生まれ育ち、できるだけ他の地域での生活歴の少ない高齢者だけを対象としたことがあった。今回、そのような方法をとらなかったのは調査に十分な時間を当てることができなかつたという事情もあるが、転入者の多い藍住町の方言がどのような変化を起しつつあるかに関心があったためでもある。

ここで示すことができるのは、いくつかの事例調査の積み重ねでしかないが、このような変化の方向を意識しながら考察したものである。

この稿をなすために用いた資料は、以下のようなものである。なお、これらの資料はいずれも量的には十分と言ひ難いと考えられるので、適宜、筆者の日常的な観察にもとづく解釈を加えつつ述べることにする。なお、筆者は昭和58年から(以下、「昭和」はSと略して示す)藍住に住んでおり、観察対象者の一部でもある2人の子供(現在20歳と24歳)は、藍住町で成長した。

**談話資料**：藍住町在住の話者による談話を録音したものである。これは、徳島大学の岸江信介教授のもとに提出されたものであるが、話者は、いずれも藍住町在住者である。

① S2年生まれの男性(A)とS60年生まれの男性(B)との対話資料(2005年夏録音)。

② S13年生まれの女性(C)とS60年生まれの男性(D)との対話資料(2005年夏録音)。

③ S2年生まれ(E)、S26年生まれ(F)、S55年生まれ(G)、S56年生まれ(H)による会話資料(文字資料のみ。2000年冬の録音による)。いずれも女性である。なお、G・Fの発話は極めて少ない。

録音時間は、①が35分、②が30分である。

**アンケート資料**：今回は、1999年の調査に基づく『徳島県言語地図』(以下、『言語地図』と略称する)の調査と、ほぼ同じ項目(120項目ほど)について小規模な調査を行った。回答者のうちわけは、藍住町生え抜きの女性K(S10年生まれ)、同じく男性Y(S31年生まれ)、鳴門市大麻町出身で藍住町在住(20年以上)の女性T(S31年生まれ)、藍住町で生まれ育った女性H(S56年生まれ)、同じく男性X(S60年生まれ)の5名である。

**アクセント調査**：2005年、高校3年生2名に、第3類を中心とする2拍名詞23語、および3拍動詞22語について調査したもの、および1991年に藍住町在住の女性(S19年生まれ)と男性(S22年生まれ)の2人に実施した分、2拍名詞第1類～第5類の各4語ずつほかの調査である。

念のために、2拍名詞各類に属する語の例を一部示せば、次のようなものである。

第1類 梅、鳥、庭、箱

第2類 石、紙、河、音

\* 徳島大学総合科学部

第3類 池、犬、雲、山

第4類 糸、空、父、松

第5類 赤、秋、雨、猿

なお、2拍名詞について第3類を調査の中心に据えたのは、これが第1類と統合しているか、第2類と統合しているかで、徳島県方言の区画を決定する大きな手がかりとなるからである。「山」を例に取ると、徳島市式（京阪式）アクセントでは最初が高い「高低」に発音されるが、これが「高高」に発音されれば、徳島県下では美馬・三好両郡に見られる讃岐式（第1類と第3類が統合）であり、「低高」に発音されると東京式と認定できるからである。

その他：筆者が出演している四国放送テレビ「おはようつくしま」に寄せられた電話のうち、藍住町の方言を反映すると判断できるものや、藍住町出身者によるインターネット上の方言情報なども参考にした。

## 2. 藍住町の方言区画上の位置づけ

藍住町の地理的位置については割愛するが、ここでは、方言区画上の位置づけのみについて記す。森重幸（森1982）に従えば、藍住町は下郡<sup>しもごおりさとぶん</sup>里分に属する。

ちなみに徳島県は方言区画上、①山分<sup>いげやま</sup>（祖谷・山城・一字・木頭・木沢・上那賀）、②上郡<sup>かみごおり</sup>（三好・美馬）、③下郡（阿波・麻植・板野・鳴門・徳島・名西）、④うわて（勝浦・那賀・小松島・阿南）、⑤灘<sup>かいふ</sup>（海部）の5つに大きく分けられ、これに中分、里分の区別を重ねることができる。里分地域は大まかには、池田町より下流の吉野川流域（讃岐山脈地域を含む）および鳴門市から阿南市（新野・福井・椿）までの県東部地域である。中分は山分と里分との中間地帯である。

## 3. 発音の特徴

### 1) 「セ」の発音

「セ」が「シェ」と発音されるのが、西日本方言の特徴の一つであった。この発音をする人が少なくなっていることは、日常的に感じていることであるが、今回使用した資料の中で確認できたのは、次のような例であった。

談話資料①の話者Aは、30回の「セ」のうち、「シェ」が1回（センヨーセン＝専用線）だけ現れた。ただし、29回の発音の中には、「セ[se]」と「シェ[, e]」の中間的な発音と見られるものもあった。また、話者Aよりも若い、話者Cでは、半数程度が「シェ」になっている。なお、判断の困難な例もあった。

### 2) ガ行鼻濁音

下郡（阿波郡・麻植郡以東の吉野川下流域）は、ある程度鼻濁音が現れる地域（LAJ、平山1968・1992他）であるが、今回の調査では、明確に鼻濁音で発音されている例はなかった。

### 3) アクセント

藍住町のアクセント体系は、全体として徳島市と同様に京阪式である。これは基本的に変化していないように見える。しかし、若年層においては語によって東京式アクセントになる例も現れるようになってきた。

#### (1) 2拍名詞のアクセント

ところで、談話資料①からは、やや興味深い事実が分かる。それは次のような点である。

「駅」：Aは「高高」で京阪式だが、Bは「高低」の東京式になっている。

「今」：Aは「低低」の京阪式だが、Bは「低高」（助詞がついた「今は」の場合、「低高低」で第5類アクセントになっている。）

「駅」の例が示すように、語によっては若年層において東京式アクセントが現れることは、筆者の家庭（二人の子供は筆者のアクセント体系とは異なるアクセントを用いる）や周辺地域で観察できる。また、高校生に対するアクセント調査では、「駅」だけが二人とも「高低」（東京式）に発音された。

なお、第5類について付言しておく。この類は、半世紀前であれば「サルー」（高く発音される部分を太字で示す）のように発音されたが、現在ではほとんど、このようには発音されない。1991年の調査の際に、このような発音をする人も（藍住町には）いるということが話題になった程度である。

### 4) 訛音<sup>かおん</sup>

#### (1) ハ行とサ行

談話資料①の男性Aでは「七年」を「ヒチネン」

の他、「こそあど」の「そ」が「ホ」に発音される。男性Bには、「ソーナンヤ」が多いが、「ホノアイダ、ホノウエ、ホンナ」も現れている。なお、「そう」は、若い世代のみならず、肯定の返事の時などには「ソー」と発音されることが多く、しかも共通語（標準語）アクセントで発音されることが多い。

## (2) 音を伸ばして発音する

「木」を「キー」(B)、数の「二」を「ニー」(A)のように発音することは、京阪方言に属する地域で珍しいことではない。その他、「二人」を「フターリ」(A)、「何」を「ナニー(低高低)」と発音する(A、C)例が聞かれる。また、「着とる」が「キートル」と発音されている(「4. 動詞」の項を参照)。これらについては、森(1982)によっても指摘されている。

3拍の形容詞で強調表現ではないにもかかわらず、ヒロイー(広い)、カタイー(堅い)のように活用語尾の直前が伸びる発音がなされることがある。1991年の調査では、アクセント調査用紙を読んでもらっているときに、このような発音があった。同席者から、これが藍住方言の特徴のひとつだという説明を受けた。

## (3) その他

「あそこ」を「アスコ、アシコ」、「お前」を「オマイ」、「手伝い」を「テンナイ」と発音(2回)などが観察できた(A)。

## 4. 形容詞

### 1) 連用形ウ音便の衰退傾向

形容詞の連用形がウ音便の形で実現されるということは、西日本方言の特徴とされてきた。しかし今や、これが原形、すなわち「〜ク」の形で、高齢者層においてさえ意外と頻繁に現れるという事実は、県下各地で確認できる。このことは、筆者の言語生活を通じて日常的に観察していることでもあり、また平成11年度の阿波学会による井川町調査以降、つねに意識してきたことである。

談話資料②において、女性話者Cは「珍しく(ない)、仲良く」などの形を使っている。

アンケートによる調査では、ク活用の形容詞について『言語地図』の調査と同様に、「最近の公衆電

話は赤くない」の「赤くない」の部分はどう言うかを尋ねている。その結果は、親しい友人に話すという日常的場面では、「アカクナイ」と答えた高校生男子を除いて、青年層・中年層・高齢者層のいずれもが「アカーナイ」という下郡・うわて・灘に多い形式を用いると回答し、先生の質問に答えるという公式的場面では全員が「アカクナイ」と回答している。

シク活用形容詞の「うれしい」の場合、音便形(ウレシュー)と原形(ウレシク)のどちらを使うかという質問に対しては、親しい友人に話す場面で女性回答者が「ウレシュー」と答え、男性回答者は「ウレシク」を選んでいる。一方、公式的場面での形式は、全員が「ウレシク」を選んだ。

筆者の日常的な観察に基づけば、形容詞連用形の音便形使用は、若い世代において消えつつあり、またすべての世代を通じて公式的場面においては、音便形を使わないという傾向が定着してきたようである。

## 2) その他

(1)「良い」は、「エー」「イー」両方の形がみられる。特に女性Cは「イー」が多い(「ドウ ユータラ イーンカナ?」等)が、女性の方が「イー」の方を用いる傾向が見られる点は、県内各地で確認できる。なお男性話者Aには1例だけ「イー」が見られ、「エー」は22回使用されている。Bは2回だけだが「エー」を使用している。

A: ドナイ ユータラ イイン?

A: エートコヨ。ホンマニ。

B: エートコナンヤロナァ。

(2) 形容詞連用形がウ音便以外の形になることがある。「大きく」に相当するところが本来のウ音便形「オーキュー」ではなく「オーキー」の形で現れている。このように語幹末が母音イを含む場合(「嬉しい」も同様である)、「〜キュー」「〜シュー」等の拗音形を取らず「〜キー」「〜シー」のような形になることは、全県的に見られる現象であり、大阪方言などにも認められる。

C: 婆ちゃんよりオーキー(大きい)なって

## 5. 動詞

「着る」という動詞が「タラ」「トル」などに続

くとき、連用形が「キー」となる。例えば「アカイ  
ボーシ キートンガ ヨーケ オルワ (赤い帽子、  
着ているのが大勢いるよ)」のような例である。こ  
れは、あまり指摘されることはないが、徳島方言の  
特徴の一つである。下郡地域に限った現象ではない。

その他、動詞に関して、談話資料からは以下のよ  
うな現象を指摘することができる。

「行く」が「た、て、とる」に続くときは「イタ、  
イテ、イトル」になる。

「違う」が「チャウ」になる (ABC)

チャウダローケンド

「戻ってくる」は「モンテクル」になる。

モンテコナンダラ アカン

## 6. 動詞のアスペクト (～ている、～ておる、 ～とる、～よる)

(1) 「～とる」が「～トー」になることがある。

A: ハイットーカ (入っとるか)?

B: エキデ キトー (着とる) ヒト オランヨ

D: ナンカ モットー (持っとう)?

もちろん「～トル」「～トッタ」も現れる。

(2) 「～とる」に「の」が続く場合、「～トン」  
になることがある。

C: ハナレトンヨ (離れとる [の] よ)

C: オモートンデヨ (思うとるのよ)

B: シットンヤナア (知っとるのやなあ)

(3) 「～よる」がカ行に活用する動詞に続く場  
合には「～ツキョル」になる。

B: イッキョーツテ (行きよるって)

A: イッキョツタン (行きよったん)

## 7. 断定 (指定) の助動詞

ここでは、断定の助動詞「ダ」および推量の「ダ  
ロー」等もいっしょに扱うこととする。

西日本方言に属する地域である徳島県では、断定  
の助動詞として「ジャ」が使われるのが普通であっ  
た。「あれは雀じゃ」「ええ天気じゃなあ」「花見に  
行ってきたんじゃ」などである。「ジャ」が一般的な言  
語体系の中で、「静かだろう」「暑いだろう」などの  
場合に、「～ジャロー」も現れるが「～ダロー」が  
多いという特徴が確認されてきた (『言語地図』等)。

この、以前であれば「ジャ」が用いられてきた位  
置に「ヤ」が進出してきている。『言語地図』から  
も、「雨だ」の場合に「雨や」と言う地域が下郡で  
増えてきていることを推測できる。(なお、海部地  
域では、以前から「ヤ」の使用が多い。)

さて、助動詞「ジャ」が「ヤ」に取って代われ  
つつある状況は、談話資料からも明らかである。

若い世代は、ほとんどすべて「ヤ」になっている。  
(B = 77回、D = 26回)。

B: サラリーマンニ ナルンヤナア。

B: ヘエー。 エートコナンヤロナア。

男性Aは「ジャ」が多い (51回) が、「ヤ」も現  
れ (16回)、女性Cは、「ジャ」16回、「ヤ」35回と  
「ヤ」が優勢になっている。ともに「ケン」や「ケ  
ド」が後に続く場合には「ヤ」になりやすいよう  
である。

A: 配車係チュウング オルンヤケンド、ソレガ  
振り分ケシヨッタワケ。

A: ドコソコノ旅行ガ アルンジャケンド、行ケ  
ヘンデッテ……。

C: ヤッパリ毎日ガ勉強ジャナ。ホーユーコトヤ  
ナ。

男性Aには、例外的に「ダ」も現れる (タバタン  
ダナー = 食べたんだなあ)。また、女性Cにも、「～  
くれとる様ダシ、どうなんダロナ、トップダツた」  
のように「ダ」が現れる。

男性より女性の方に「ヤ」の使用が多い傾向が見  
られる。また、若い世代で、その使用率が高くなっ  
ている。

筆者の日常的な観察から、「ジャ」を用いるあら  
ゆる世代において、文末では「ジャ」になるが、文  
中においては「ヤ」になるという傾向を指摘するこ  
とができる。

## 8. 打消の言い方 (～んかった、～へん、～ ひん、～んでせんで)

### 1) ～んかった (打消過去)

京阪方言に属する徳島方言での打消過去の言い方  
は、「～なんだ」が従来の形式であった。これが  
「～んカッタ」になる例が、談話資料①②の両方に  
現れる。S13年生まれの女性話者Cにこれが見られ

ることには、注意を促しておく価値があるだろう。1988・89年の大阪市での調査では、40代（話者Cとほぼ同年齢）以上でこのような形式（ただし、「行かんかった」）を用いているのは、10%以下である（岸江・真田1990、真田1992）。なお、森（1982）は、これが里分で使われるとしている。

C：タリンカッターンカモ シレンカッターケド  
（足りなかったかも知れなかったけど）

この形式が若い世代にも用いられているのは、言うまでもない。

B：～イワンカッターツケ？（言わなかったっけ）

アンケートに対する回答を見ると、「しなかった」「行かなかった」に相当する言い方として、藍住生え抜きの2人は、「セナンダ」「イケヘナンダ／イカナンダ」という「ナンダ」を使う回答を寄せているが、他の3人は、いずれも「センカッター」「イカンカッター」と答えている。

打ち消し過去の表現は、「～ナンダ」から「～ンカッター」に代わられつつあるのであろう。

## 2) ～へん、～ひん

「行かない」を「行カン」と言うのは県下に共通の言い方だが、山分以外では「行ケヘン」も使われ、また中分では「行カヘン」も現れるというのが、森（1982）の指摘である。『言語地図』では、「今日は仕事に行かないよ」の「行かない」の部分、「仕事をしない」の「しない」の部分、「誰も来ない」の「来ない」の部分、「テレビを見ない」の「見ない」の部分について、どのように言うか等の質問を用意している。

これらの項目に対する回答を見て注目されるのは、「見ない」の場合である。『言語地図』を見ると「ミーヒン」を使うという回答は鴨島町（現吉野川市）・徳島市・佐那河内村・小松島市あたりに広がりがつつあるように見える。藍住町で得られた回答によれば、S10年生まれ的女性Kだけが「ミーヘン」であり、S31年生まれの男女YとT、S60年生まれの男性Xはともに「ミーヒン」を使うと答えている。S56年生まれ的女性Hは、「ミン」を選んだ。

一方、「行かない」「しない」に対しては、それぞれ「イケヘン」「セーヘン」が優勢であり、「来ない」に対しては若い層で「ケーヘン」より「コン」を使

うという結果になっている。

「行かない」について、もう少し詳しく述べておきたい。談話資料①の男性話者Aは3回のすべてが「イケヘン」である。ところで、『言語地図』では、「今日は仕事に行かない」「あんな恐ろしい所へは二度と行かない」の「行かない」の部分をもどどのように言うかを調査しているが、これによれば、下郡とわてで「イケヘン」が優勢であり、「イカン」が県下全域に広がっている。この分布状況からは、古い形式「イカン」の上に新しい形式「イケヘン」が広がってきたと解釈できる。

ところで、アンケート調査の結果を見ると若い世代の二人（H、X）は、「仕事に行かない」の場合に「イケヘン」を、「二度と行かない」の場合に「イカン」を使うと答えている。つまり強い否定の場合に「イカン」を使うと解釈できる。これが新しい傾向なのかどうかについて今回の調査の範囲では、判断できない。

## 3) ～んでせんで、～んでせんか

この形式は、談話資料にも現れていないし、『藍住町史』の方言の項にも記されていない。筆者が最近1度聞いただけの言い方であるが、ここに述べておく。

「……落とすわけにいかんでせんで」というのが、その時の言葉の一部であるが、この言い方を取り上げている資料としては、管見のところでは『江原郷土誌』（江原北校1933）と『徳島の方言』（高田1985）があるだけである。

あるでせんか      あるではないか

（『江原町郷土誌』）

アルデセンカ      有るではありませんか。

（『徳島の方言』）

高田は、徳島市を中心とした調査に基づいて、これを「新しく発生または流行」した言い方で、「大方は戦後流行」したもので、主として女性が使用する形式に分類している。

この形式について、筆者は合計4件の事例しか確認できていないのだが、そのうちもっとも具体的な証言を添えておくこととする。徳島市の栄町で生まれ育った40代女性の証言である。

おばあちゃんが使うとった。「そんなことしたら、いかんでないで」と言われるよりも、「そんなことしたら、いかんでせんで」と言われる方が、ずっとこたえた。

珍しい言い方であるが、記録としてここに述べておく。「～ンデセンデ」の語構成については保留しなければならない。

## 9. ～なる（成る）

共通語では「～になる」あるいは「～となる」というところを、「～なる」と言う例が見られる。男性Aの発話の中に、「アキナッテ（秋なつて）、ミンエーカナッテ（民営化なつて）」のような言い方が現れるが、このような形式は徳島方言の特徴かもしれない。これについては、川島信夫が「徳島では、権威付けのために『開会なる』というような言い方をする」という趣旨のことを述べている。

インターネットで検索してみると、出来事を羅列する場合や新聞の見出し的表現などとして、「東門新装なる」「日本郵政公社、民営化するか」のような表現が見つかりはするが、話し言葉の中で、これを確認することは困難である。また、若い世代からは耳にすることがない言い方でもある。

新聞の投書欄からはこの類をいくつか見つけることができる。徳島新聞の「ちょっとええ話」945日分、「読者の手紙」1095日分、朝日新聞「声」920日分を検索した結果、「～なつた」「～なる」についてだけではあるが、下にあげるような例が見つかった。徳島新聞からは8例、朝日からは1例のみであった。ここで「話 991215」は1999年12月15日付夕刊の「ちょっとええ話」、「紙 000712」は2000年7月12日付朝刊の「読者の手紙」欄に出ていたことを示し、〔 〕内にGoogle検索でのヒット数を示す。

新装なつたロープウエー（話 991215）等。〔25900〕  
処分が発表なつた（紙 010808）〔315〕

可決なつた（紙 980509）〔1〕

法制化なつた（紙 000712）〔1〕

（バスが1台）増車なる（話 000401）〔0〕

このように語によってインターネット上での現れ方は違うが、徳島方言では「～なる」の言い方がよく使われていると言えるであろう。なお、朝日の1例

は、鳥取県での挨拶「晩なりましたなあ（＝今晚は）」である。

## 10. アンケート調査から

以下、『徳島県言語地図』で採用された質問項目によるアンケート結果の興味深いものについて、羅列的ではあるが述べておく。

なお、ここでは方言形を括弧にくくることはせず、単にカタカナで表記することとする。

### ○そら（吉野川上流地方）

Kのみが「板野町からを言う」と回答。

### ○「捨てる」をどう言うか

K、Y、Hの女性がともにヒテル、男性はステルを選んだ。ヒテルは、東祖谷（現・三好市）・木頭（現・那賀町）・岩倉（美馬市）・海南町（現・海陽町）大里の資料に見られるが、『言語地図』では出現しない。『藍住町史』に記録されている方言形はシテルであり、こちらは県下各地で存在が確認されている。

### ○「なくなる」をどう言うか

Kはノーナル・ナイヨーニナルを選び、Yはノーナルを、T、H、Xはナクナルと答えている。このことから形容詞ウ音便が衰退傾向にあることが分かる。

### ○「できなくなつた」をどう言うか

Hだけがデキンクナツタを選んでいる。この言い方は、県下各地でも増えつつある新しい形式である。他の回答者はデキンヨーニナツタを選んでいる。これは従来からの言い方である。

### ○「トウモロコシ」をどう呼ぶか

主として60歳代以上を対象とした『言語地図』では、下郡一帯に分布する優勢な語はナンバであるが、KとYがこれを選び、T、H、Xはトモロコシを選んでいる。方言形のナンバは衰退傾向にある。

### ○「蛇」をどう呼ぶか

徳島県下において、蛇を表す言葉はかつて実に多様であった。『藍住町史』にも「ぐちなご・ぐちなわ・ぐちゅう・ぶちなご」が、そして特に青大将をさす言葉として「やどうし」が採録されている。アンケートの回答は、Kのみがヘビ・グチナゴの2語

を選んだ他は、すべてヘビを選んでいる。

蛙、カマキリ、土筆についても調査したが、すべてカエル、カマキリ、ツクシという共通語形が選ばれている。

#### ○「クマゼミ」「アブラゼミ」をどう呼ぶか

『藍住町史』には、クマゼミに対して「せんだぜみ」、油蟬については「たなばたぜみ」という興味深い語形が示されているが、今回の調査ではクマゼミ、アブラゼミという共通語形しか回答されなかった。若年の二人は、ともにただセミとだけ答えている。動植物類について、かつての細かい区分を示す名称がだんだん忘れられてゆく姿が、ここにも見られる。

#### ○「梅雨」をどう言うか

徳島県下の言い方としてはナガセであり、『言語地図』によっても、まだ県下広く分布している様子が見られるが、一方では日常会話の中で普通に使用されるのはツユであるというのが筆者の観察である。

今回の調査でも、ナガセを選んでいるのはKのみであり、Kは同時にツユも選択している。他は全員ツユである。

#### ○「傘にのせる」と言うか

板野郡に特徴的な言い方の一つとして、誰かに傘を差し掛けることを「傘にのせる」と言うのがある。この言い方をするかどうかを聞いたところ、これもKだけが「言う」と答えている。若い世代は、もうこの言い方を知らないようである。

#### ○動詞連用形ウ音便から促音便へ

今回、特に「買う」「洗う」の2語についてウ音便形を使うか促音便形を使うかを調べるための項目を追加してみた。

それぞれについて、目上の人に言うときと、友達に言うときとで、「コーテ来る／カッテ来る」「アローテ来た／アラッテ来た」のどちらを選ぶかを聞いたものである。その結果、「買う」の方は

目上に言うとき

K：カッテ、Y：コーテ、T：カッテ

親しい友達に言うとき

K：コーテ、Y：コーテ、T：カッテ

のように、Kのみがウ音便形コーテと促音便形カッテを使い分ける回答を示している。

一方、「洗う」については、対目上場面、対友人場面のどちらにおいても、ウ音便形アローテは誰も選んでいない。

近所の女性達の気楽な会話の中でさえ、徳島方言の通常の形式であったウ音便形が現れないこと、しかも藍住町出身者はもちろん、徳島県内出身者でもウ音便形をほとんど使っていないことが気になっていたのだが、このアンケート結果からは共通語形の促音便の方が優勢になっているらしいことが推察される。なお、この項目については、Y、H、Kの3名だけが対象になっていたものである。

#### ○ごっつい・めっちゃ・むっちゃ

「このうどんは非常にうまい」「この漫画は非常に面白い」の「非常に」の部分はどう言うか尋ねてみた。選択肢として、①ゴツツイ、②エライ、③エロー、④カサ、⑤メツソ、⑥メッチャを示し、自由な記述をもしてもらえる方法である。その結果、

食べ物に対しては

K：メッチャ、Y：ゴツツイ、T：モノスゴク

H：メッチャ、X：ムッチャ

漫画に対しては

K：ゴツツイ、Y：ゴツツイ、T：エライ

H：メッチャ、X：ムッチャ

という回答が得られた。

Kが食べ物についてメッチャを選んだというのが注目されるが、ここではその事実を確認しておくだけにとどめる。Tがモノスゴク、エライを選択しているのは、大阪での生活経験がある女性という要因が影響しているのかもしれない。H（女性）がメッチャ、X（男性）がムッチャを選んでいるのは、若者言葉としてこれらの言葉が使われるようになってきたための現象であろうか。家族間でも使用語形が異なっている。それぞれ友人の影響の方が大きいかもしれない。

この結果からだけで将来の予測を立てるのは慎まなければならないが、ゴツイが全国的な広がりを見せている時代に、ここではそのゴツイが衰退するかのような様相を見せていることに、今後継続的な観察が必要という意味で注目しておきたい。

#### ○いっこん・にこん

金沢治（1976）には、イッコンについて「【助数

詞】魚を数える時に用いる（祖谷）南方名西山分までは魚だけでなく物を数える時に用いる」と述べられている。また、この語は室町時代の京都で使われていた、大きな魚を数えるときの「<sup>いっこん</sup>一喉」にさかのぼることができる（『時代別国語大辞典 室町時代編一』）。

ところで、イッコン、ニコンとものを数えるのは、阿南市周辺の言い方という印象がある。その阿南市あたりでもイッコンだけしか使わないという傾向にあるらしい。これについて「おはようとおくしま」に寄せられた情報の中に、鳴門でも使うというのがあったことから、『言語地図』の調査項目に加えられた。その結果を見ると、下郡地域でも使うという回答が数は少ないが得られている。

今回のアンケートでは、K、T、Yが「昔聞いたことがある」を選んでいるだけだが、Tは「一つずつ」をどう言うか尋ねたところでは自由記述として「その他」の欄にイッコンズツと記入している。

イッコン、ニコン……と数えることはしないが、イッコンという語を使うこともあるということのようだ。阿南市近辺と同様に、イッコンだけはしばらく残るのかもしれない。

## 11. 方言談話

今回の分析に用いた談話資料の一部を示す。

### 談話資料①

録音日時：2005年8月19日

話者A：男性、昭和2年生まれ

話者B：男性、昭和60年生まれ

A：ホナ カリニ ゼンコージサン イクンダッタラ、ゼンコージサンオ メダマニスルカ、ホラ ホコエ ツケテ、ツケタシテ クロベダムオ ヒツツケタリシテ、

（ほな [=じゃあ] 仮に善光寺さん行くんだったら、善光寺さんを目玉にするか、ほら、ほこへ [=そこに] 付けて、付け足して黒部ダムを引っ付けたりして、）

B：ホー。

A：マァ オキヤクサンガ イキタイヨウナ トコロオ コツシャエルワケヤ。

（まあ、お客さんが行きたいようなところをこっ

しゃえる [=作る] わけや。）

B：ヘー

A：ホンダラ トビツイテクルデエ。シー。ホナケン コンナンワ ヨーシタワ。

（ほんだら [=そうすると] 飛びついてくるでえ [=飛びついてくるでしょう]。んー。ほなけん [=だから] こんなんはようしたわ。）

B：ホーナンヤァ。ソレデ ヨーケ リヨコウイッタリトカ、ホノー、ヨーケ バシヨオ シットンヤナァ、ジーチャンワ。

（ほうなんや [=そうなんだ]。それでようけ [=たくさん] 旅行に行ったりとか、ほの一、ようけ場所を知っとんやなあ、じいちゃんは。）

A：シー。ホレデ ホレガ ナニージャワナァ。シュジャワナァ、ダイタイガ。

（んー。ほれで、ほれが何じゃわなあ、主じゃわなあ [=主になるだろうな]、大体が。）

ホレヲ サンジューロクネンモ ヒチネンモ シタンデヨ。

（ほれを36年も7年もしたんでよ。）

B：ソナンニシタンヤァ。ヘー。ジーチャンホレ イッショニ イッタンヨナー？ ソレデキニイッタトコロトカアル？ ココガ ヨカッタートカ。

（そんなにしたんやあ。へー。じいちゃん、ほれ一緒に行ったんよなあ？ それで、気に入ったところある？ ここがよかったとか。）

A：ホヤナァ、キニイッタトコツテ、ハジメテノトコハ、アー エーナート オモウワ。イタラナァ。（ほやなあ [=そうだな]、気に入ったとこって、初めてのところは、あー良えなあと思いうわ。行たらなあ。）

B：シー。

A：シー、ホラー オモイデニ ノコルヨウナトコロモ アッタダロー。ホラー オマエ アレー トーホクノホー イッタトキニ トワダコツテナァ、（んー、ほりゃあ [=それは] 思い出に残るようなところもあったらろう。ほらあ [=そりゃあ、お前、あれ、東北の方行ったときに十和田湖ってなあ、）

B：ト、トワダコ？

(と、十和田湖?)

A: ウン。 トワダコッテ ナニー オオキナミズ  
ーミガ アンデェ。

(うん。十和田湖って大きな湖があんでえ [=あ  
るだろ])

B: ソーナンヤ。 チョット ワカランナ。

(そうなんや。ちょっと分からんな。)

A: ホコヤ ホッチ アキナッテ コーヨージ  
キニナッタラ キレーナッテ イロワケガ。

(ほこや [=そこは]、ほっち [=そっちは] 秋な  
って紅葉時期になったら綺麗になって、色分けが。)

## 談話資料②

録音日時：2005年8月18日

話者C：女性、昭和13年生まれ

話者D：男性、昭和60年生まれ

D: ジャー バーチャンガ イチバン カンゲキシ  
タコトオ。

(じゃあ 婆ちゃんが 一番 感激したことを。)

C: バーチャンガ イマ ロクジューナナサイヤケ  
ド イチバン カンゲキシタンワナ、 オマハン  
ガ ンマレタ[mmareta]トキノ コトナンヤケド  
ナ、オカアサンカラ キートルデ?

(婆ちゃんが 今67歳やけど、いちばん感激した  
んわな、おまはんが産まれたときの事なんやけど  
な お母さんから 聞いたとるで?)

キーテナイン?

(聞いてないん?)

オマハンワナ トクシマダイガク イガクブデ  
ウマレタンジャ。

(おまはんはな、徳島大学医学部で産まれたん  
じゃ。)

ホイデナ ウマレタトキニナ ヘソノオオナ ク  
ビニ ニカイモ マイトッテナ、

(ほんでな、産まれた時にな、へその緒をな、首  
に2回も巻いってな、)

ホイデ イガクテキナ コトワ ヨー ワカラン  
ケンド、

(ほいで [=それで] 医学的な事はよう分からん  
けど)

ナンカ シンオンガ デル キカイオ ツケテ、

シンオンガ トマリカケテ、ホイデ ゲカノ セ  
ンセモ ツイトッテクレテ、テイオウセツカイ  
セナ イカンカ ワカランッテ イワレヨツタンヨ。

(何か心音が出る機械を付けて、心音が止まりか  
けて、ほんで 外科の先生もついとって来て帝  
王切開せな分からんって言われよったんよ。)

ホナケドナ テイオーセツカイセント カロージ  
テ ウマレタケド、カシジョータイデ シバラク  
コエガキコエナンデ、

(ほなけどな、帝王切開せんと、辛うじて生まれ  
たけど、仮死状態でしばらく声が聞こえなくて、)

「オギャー」ツテユー コエ キータ トキニー、  
バーチャン ホンマニ カンゲキシテナ ナミダ  
ガ ポロポロ デテ キタンヨ。

(「おぎゃー」って言う声聞こえて、婆ちゃん ほ  
んまに感激してな、涙がぼろぼろ出てきたんよ。)

## 12. おわりに

「藍住町に方言ってあるんですか」と聞かれたこ  
とがある。また森重幸(1982)は、下郡地方の言語  
的特徴として「共通語的表現が多い」ことをあげて  
いる。事実、藍住町で暮らしていると、いわゆる  
「方言」を意識させられることは少ない。また、仕  
事の関係であろうか、藍住町で育った人が藍住町内  
で東京風の話し方をしていることがある。また、町  
外から転居した人々が集まるような機会に、互いに  
それほど親しくなっていない段階では、やはり東京  
風の言い方が聞かれ、親しくなるにつれて徐々に徳  
島に共通の話し方をするようになるような場面を見  
かける。

このような、さまざまな地域から移住した人々が  
藍住町生まれの人々と接触するとき、言語がどのよ  
うに変化するのか興味深いところである。

ところで、アクセント変化を観察すると、3拍動  
詞のように徳島市式(京阪式の種類)アクセントか  
ら、東京式アクセントへの変化ではなく、讃岐式に  
変わっている場合と、2拍名詞の一部に見られる東  
京式アクセントへの変化を示す場合とがある。これ  
が今後どのような様相を示すようになるのか、継続  
的な観察が必要であろう。

また、地域に特有の「俚言<sup>りげん</sup>」を耳にする機会は少

なくなっている。「梅雨」を意味する「ナガセ」がだんだん「ツユ」に取って変わられつつあることは、折に触れ感じるところであるし、「早く」の意味の「ヘンシモ（片時も）」は「年寄りを使う」として話題になった（1991年の調査）。このような俚言は『藍住町史』に納められているが、すでに確認の困難なものもある。文化の記録として、このような「俚言」の残存状況を確認しておく必要もあるのだが、今回はそれができなかった。

## 謝 辞

今回の調査は、諸般の事情により、調査にご協力下さった方々のお名前を記すのはさしひかえますが、ご多忙中、無理なお願いを聞いてくださった方々に厚く感謝申し上げます。

## 文 献

藍住町史編集委員会編（1965）：『藍住町史』藍住町。  
 上野和昭・仙波光明（1993）：「徳島市における三拍動詞アクセントの変化の実態」『徳島大学国語国文学 第6号』徳島大学国語国文学会、29～37頁。  
 江原北枝編（1933）：『江原町郷土誌』江原北枝。  
 大西拓一郎（1999）：「新しい方言と古い方言の全国分布ナンダ・ナカッタなど打ち消し過去の表現をめぐって」『日本語学 第18巻第13号』明治書院。  
 金沢治（1961）：『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図書館。

——（1976）『阿波言葉の辞典』小山助学館。  
 金沢浩生・仙波光明・岩佐美紀・石田祐子（2001）：「相生町の方言」『総合学術調査報告 相生町 阿波学会紀要 第47号』阿波学会・徳島県立図書館。  
 金沢浩生・仙波光明・西村美保・石田祐子（2002）：「佐那河内村の方言」『阿波学会紀要 第48号 佐那河内村 総合学術調査報告』阿波学会・徳島県立図書館。  
 国立国語研究所編：『日本言語地図 1』（1966）。(LAJと略して示す。)  
 真田信治・岸江信介編（1990）：『大阪市方言の動向—大阪市方言の動態データ—』文部省科研費報告書。  
 真田信治（1992）：「関西方言の現在—変化の要因と過程—」『日本語学 第11巻第7号』明治書院、117～126頁。  
 仙波光明・石田祐子（2004）「美郷村の方言」『阿波学会紀要 第50号 美郷村 総合学術調査報告』阿波学会・徳島県立図書館。  
 仙波光明・岸江信介・石田祐子編（2002）：『徳島県言語地図』徳島大学国語学研究室。  
 高田豊輝（1985）：『徳島の方言』高田豊輝・教育出版センター、13頁。  
 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館辞典編集部編（2001）：『日本国語大辞典 第二版』小学館。  
 平山輝男（1968）：『日本の方言』講談社・現代新書160。  
 平山輝男他編（1992）：『現代日本語方言大辞典』明治書院。  
 平山輝男・上野和昭（1997）：『徳島県のことば』明治書院。  
 室町時代語辞典編修委員会編（1985）：『時代別国語大辞典 室町時代編一』三省堂。  
 森重幸（1962）：「分布図からみた徳島県の方言」阿波学会報告会資料。  
 ——（1982）：「徳島県の方言」『講座方言学11 中国四国地方の方言』国書刊行会。  
 山本俊治（1982）：「大阪府の方言」『講座方言学7 中国四国地方の方言』国書刊行会、215頁。